

連体修飾節の機能「限定」「非限定」について

ソムキャット チャウエンギツジワニッシュ

キーワード：限定、非限定、集合限定、属性限定、属性

【要旨】

本稿は連体修飾節の機能「限定」「非限定」（それぞれ「集合限定」「属性限定」と呼ぶ）について考察する。修飾される名詞のもつ複数の属性の中からある属性を取り上げる点では両者が共通するが、当該の属性が連体節として取り上げられた後、主名詞が二分されるか否か、という点では異なる。前者が「連体節が示す属性と反対の属性」と、後者が「連体節が示す以外の属性」と対比されることを手がかりに両者の区別を試みる。

1 はじめに

連体修飾句・節（以下、まとめて「連体節」と記す）の代表的な研究の一つに寺村(1975-78, 1980, 1984)が挙げられる。氏は英文法でよく行われる「関係節」「同格節」の分類に対して、連体節を「内の関係」「外の関係」として分類することを提案した¹。寺村以外に奥津(1974)なども分類を提案したが、寺村の分類とさほど変わらない。その後の研究もこの枠の中で行われるものが殆どで、新たな展開はあまりみられない感があった。

ところで、連体節を「限定・非限定」「制限・非制限」²という点に目を向けて考察することも少なくない。日本語の連体節に関する膨大な研究においても度々言及されるものの、少なくとも管見の範囲ではこの問題に正面から取り組むものがまだ少ないように思う。最近の研究の中で例えば、「限定」と「非限定」の連体節の違いが、いくつかの具体的な統語現象において現れることを指摘する三宅(1993)や「限定」「非限定」と連体節中のモダリティーの生起可能性との関わりを示唆する三原(1995)等があるが、日本語においては両者の区別が重要であるように思われる。

本稿は、連体節の機能「限定」「非限定」に立ち返って、先行研究を整理しながら両者の特徴を指摘し、その異同を明確にしたい。また、それぞれが何と対比されるために用いられるかに注目し、それを手がかりに両者の区別を試みる。それによって、どのタイプにも入らない

(とされる) ような例を説明し得るということを示す。

一口に連体節といっても様々な種類のものがあるが、本稿は「動詞句による連体節」に限定して分析することにする。

2 「限定」「非限定」について

本節は従来言及されている「限定」及び「非限定」の連体節について先行研究を整理し、本稿の立場を述べる。

まず「限定」の連体節についてであるが、先行研究においては、いずれもその定義があまり変わらず、全体として共通性の高い見方を示している。例えば、次のようなものが挙げられる。

「あるセットの中から一つをとり出す修飾」(寺村:1984)

「修飾される名詞の表す集合を分割し、その真部分集合をつくりだす」(金水:1986)

「主名詞に対して何らかの限定を加える³ような修飾」(三宅:1993)

連体節が「限定」的に働く例として(1)(2)が挙げられる。

(1) 「サンマを焼く」男⁴ (寺村(1975)の例)

(2) さて、次は「中学生の登校拒否の子供をもつ お母さんからうかがった話です。

(「『超ストレス解消法』という大風呂敷」)

例(1)のように、「サンマを焼く男」は「男」の示す対象の集合を分割し、「サンマを焼く男」が「男」の真部分集合になるため、連体節「サンマを焼く」は「男」に対して限定を行っているといえる。同様に、(2)の「中学生の登校拒否の子供をもつお母さん」も「お母さん」の集合を分割し、「中学生の登校拒否の子供をもつお母さん」が「お母さん」の真部分集合になる。言い換えれば、(1)(2)においては、「男」「お母さん」一般ではなく、その一部分である「サンマを焼く男」「中学生の登校拒否の子供をもつお母さん」を話し手が対象として指し、両例における連体節は修飾される名詞(以下、「主名詞」⁵と呼ぶ)を「限定」するのである。

このように、本稿でいう「限定」の連体節は、上述した先行研究で述べられたものとさしたる違いはなく、つまり、主名詞の示す対象の真部分集合をつくり出すものとする。

一方、「非限定」の連体節は、

「ある特定のものについて、その文にとって何らかの意義をもつと考えられる情報をつけ加える」(寺村:1984)

「背景、理由、詳細説明などの情報を主文に付加する」(金水:1986)

「主名詞に対して限定は行わず、ただ特定の情報を付加する」(三宅:1993)

のように定義される。これらの研究において共通するのは、連体節が主名詞の真部分集合をつくらないことであり、本稿も「非限定」の連体節を、主名詞の真部分集合をつくらず、連体節がない場合と全く同じ対象を指すものと考えたい。したがって、「非限定」の連体節の場合、連体節を取り除いても指示対象が一定するのである。

(3) B子さんは、〔少しほけてきた〕舅の世話をしている〕姑を手伝っている。

(「井戸端会議万歳」)

(4) すると背後から、四十ぐらいの男の人が、やや、モジモジとしながら、「あのう、『こんなに文学がわかっていいのかしら』って本、ありますか?」とレジの女の子に声を掛けた。／^o女店員は、ハッと耳を疑うような顔をして、もう一度その題名をたずねた。男の人は照れた感じで繰り返した。(略)〔たずねた〕男の人は、きまり悪そうに去っていった。(「知らぬが店員」)

(3)(4)のように、「少しほけてきた」「たずねた」という連体節を取り除いても(つまり、単なる「舅」「男の人」でも)指示対象は変わらない。(3)の「姑」を修飾する「少しほけてきた舅の世話をしている」も同様である。これらの例における連体節は主名詞の真部分集合をつくるように働かないため「非限定」的に働くと考ええる。

このように本稿で考える「限定」「非限定」はいくつかの先行研究で考えられているものとさしたる違いはないが、ここで考える「限定」「非限定」の区別は、寺村(1975-78)の「内の関係」「外の関係」と独立していることを明確にしておきたい。例えば、(5)(6)はともに「内の関係」であるが、(5)は「限定」、(6)は「非限定」の例である。

(5) きノウ〔気に入った〕洋服を見つけたのにサイズが合わなかった。

(6) 〔空飛ぶ円盤を見たことがある〕彼。(寺村1975の例)

このように、連体節には「限定」と「非限定」の機能が認められるが、では、なぜ全く正反対に見える両者の働きを連体節が担うのだろうか。両者に共通するものがあるのか、あるとすれば、それが何なのか、という説明が十分なされているとは言い難いだろう。

3 「限定」と「非限定」の異同

まず、「限定」について述べたい。「限定」の場合、連体節が主名詞の真部分集合をつくることは、それ以外の部分集合から区別する(即ち、それ以外の部分集合を対象外とする)ことでもある。このように、ある要素を取り上げ、他の要素から区別することを仮に「対比」と呼べば、「限定」は「連体節によってつくられる真部分集合」を取り上げ、(主名詞の中の)

「それ以外の部分集合」と対比させるといえよう。一方、「非限定」の場合、連体節が主名詞の真部分集合をつくる働きがないことは既に述べたが、それは何のために用いられるのだろうか。

(7) M子さんは〔会社を経営している〕夫のパートナーとして懸命にがんばり続けてきました。

(8) Zさんは話し続けます。「(略)」／〔聞いた〕私こそ、びっくりしてしまいました。
(「幻の世界を生きる人」)

(7)では、「夫」がもつと考えられる「家事を手伝ってくれる」「お酒が好き」等様々な属性⁷から「会社を経営している」を、(8)では「私」のもつ様々な属性、例えば「疲れた」「じっと彼の顔を見ていた」等、から「聞いた」を特に取り上げていうと見なすことができる。このように、「非限定」は、主名詞がもつ複数の属性から「ある属性」を連体節として取り上げ、(主名詞の中の)「それ以外の属性」と区別するために用いると考えられる(高橋1979、寺村1984等)。(以下「連体節の示す属性」を〈P〉、「連体節が示す以外の属性」を〈~P〉で表す)

このように考えてくると、複数のものの中からその一部を取り出し、それ以外のものから区別する点では「限定」「非限定」とも共通するが、「限定」の場合は「ある真部分集合」を、「非限定」の場合は「ある属性」を取り上げる点で両者が区別されるといえよう。しかし、本当にそうだろうか。

次の議論に入る前に、従来使われてきた名称「限定」「非限定」について考えたい。「非限定」も複数の属性からある属性を取り上げ、特徴づける働きがあることを考えれば、大島(1995)のいうように、これも一種の「限定」といえる。また、「非限定」という名称からは、それが何のために用いられるかは、わかりにくいと思われるため、本稿は大島の用語を借用し、従来いわれてきた「限定」を「集合限定」、「非限定」を「属性限定」と呼ぶことにする⁸。

「集合限定」は「連体節によってつくられる真部分集合」を、「属性限定」は「連体節が示す属性」を取り上げる点で両者が異なることを述べたが、それについてもう少し考えよう。前述した(1)(3)を再度挙げる。

(1) 〔サンマを焼く〕男 (「集合限定」)

(3) 〔少しほけてきた〕舅 (「属性限定」)

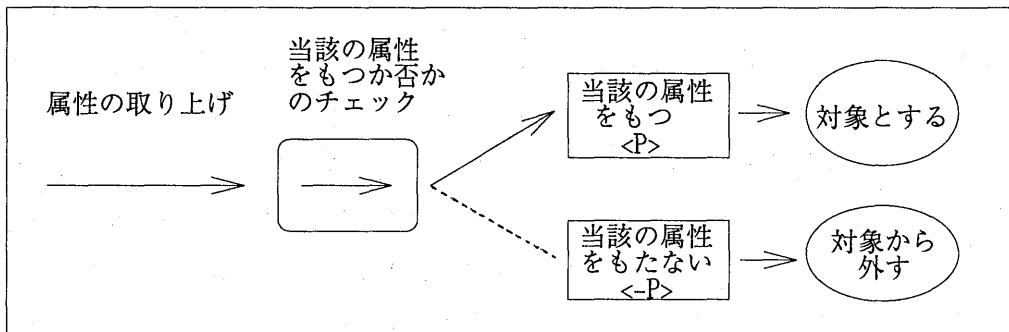
上例のように、「集合限定」の例(1)においても主名詞「男」のもつ様々な属性から「サンマを焼く」という属性を連体節として取り出すことに気づくだろう。このように、「集合限

定」も実は「ある属性」〈P〉（「サンマを焼く」）を連体節として取り出すため、「属性限定」と何ら変わらないことになる。では、なぜ(1)が「集合限定」、(3)が「属性限定」と解釈されるのだろうか。そもそも両者の違いはどこにあるのだろうかを以下で考察する。

また、「集合限定」は「連体節によって作られる真部分集合以外の部分集合」と対比されることを述べたが、「サンマを焼く(男)」〈P〉と対比されるのが「『サンマを焼く』以外(の男)」〈~P〉ということを考えて、「集合限定」は「連体節が示す以外の属性をもつ真部分集合」〈~P〉と対比されると言ったほうが妥当だと思われる。一方、先述のように「属性限定」も「連体節が示す属性」と「連体節が示す以外の属性」〈~P〉とを対比するものであるが、自然言語では、両者における「連体節が示す以外の属性」〈~P〉が同じものではない、ということも合わせて述べる。

ある対象を表すための単一の語彙がたまたま存在せず⁹、その上位概念の名詞（句）しかない場合、それに連体節を伴い、使うことがある。例えば、「サンマを焼く男」という対象を表す単一の語彙がない場合、その上位概念である「男」に連体節「サンマを焼く」を伴い、用いることができる。

図1：「集合限定」のプロセス



「集合限定」の場合、上位概念（つまり、主名詞）のもつ複数の属性から、話し手が問題にする、そして、言及しようとする対象はもっているが、対象から外すものもっていない属性を取り出し、連体節として用いる。それによって、連体節の示す属性をもつか否かのチェックが行われ、主名詞の中の、連体節の示す属性を備えるもの〈P〉が対象に含められ、そうでないもの〈~P〉は対象から外される。例(1)で考えると、「男」について列挙できる複数の属性の中から、話し手が問題にし、そして「対象とする男」はもっているが、「対象から外す男」はもっていない属性として「サンマを焼く」が取り上げられる。属性「サンマを焼く」を備えるか否かのチェックが行われた後、「サンマを焼く」もの〈P〉が対象にされ、「サンマを焼かない」もの〈~P〉が対象外とされる。

このように、「サンマを焼く男」における「男」が連体節「サンマを焼く」により「サンマを焼く男」と「サンマを焼かない男」とに分けられるように、「集合限定」は「当該の属性をもつか否か」のチェックを経て、主名詞が二分されるわけである。

「集合限定」は「連体節が示す以外の属性〈 $\sim P$ 〉(をもつ真部分集合)」と対比されることを既に述べたが、この場合「当該の属性をもつか否か」のチェックを経て主名詞が二分されるため、一方が肯定なら、他方が必ず否定（「サンマを焼く」対「サンマを焼かない」のように）になる。したがって、「集合限定」における「連体節が示す以外の属性」〈 $\sim P$ 〉は厳密にいえば〈 $\sim P$ 〉ではなく、「連体節が示す属性と反対の属性」（仮に〈 $\sim P$ 〉と記す）である。

いうまでもないが、「集合限定」の場合「連体節+主名詞」の示す対象が、連体節が示す属性と反対の属性〈 $\sim P$ 〉をもつことは考えられない。「サンマを焼く男」の示す対象が「サンマを焼かない」という属性をもつことがあり得ないことから確かめられよう。

例をもう少し加えておく。

- (9) 私生活でのストレスが大きくなると、職場も家もしんどくなり、そのマイナスの葛藤が消耗を強め、〔それに伴う〕症状が通常の社会生活を阻害しています。〔ゴロゴロするなどの疲労や消耗を軽減する〕行動が選択され、(略)。

(「ホッとタイムをつくろう」)

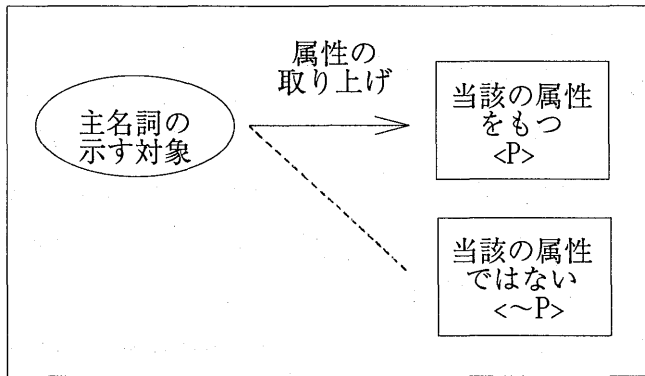
- (10) 〔よくギャグを考える〕コメディアンがいた。このコメディアンが浅草の劇場でヤクザの子分をしているときに親分に言った。(略)。(「露天風呂とトンボ」)

(9)(10)ともに、連体節が主名詞の真部分集合をつくるために用いられる。(9)では、連体節「それに伴う」「ゴロゴロするなどの疲労や消耗を軽減する」が取り出され、それが示す属性を主名詞の対象がもつか否か、チェックされ、当該の属性をもつもののみが対象とされる。同じく、(10)でも「コメディアン」の示す対象について属性「よくギャグを考える」の有無を調べ、あるものは対象とされ、そうでないものは対象から外される。

それに対し、「属性限定」は連体節がなくても主名詞の示す対象が一定し、主名詞の真部分集合をつくるよう働かない。換言すれば、主名詞の示す対象のある真部分集合を排除するためのものではなく、「属性限定」は単なる主名詞のもつ複数の属性からある属性を取り上げる¹⁰。つまり、他の属性をもつ可能性を含みながらも、とにかく連体節の示す属性はもっていることを表すのである。

「属性限定」は、主名詞の示す対象が既に決まっており、連体節が主名詞の真部分集合をつくるために用いられるのではないため、「集合限定」の場合のように「当該の属性をもつか否

図2：「属性限定」のプロセス



か」のチェックが行われず、主名詞が二分されることもない。したがって、「連体節が示す以外の属性」〈~P〉は、「集合限定」のように「連体節が示す属性と反対の属性」〈-P〉にはならない¹¹。

- (11) (彼も) 部下の仕事をきっちりと把握したうで指導すべきと思ひこみ、また〔機械とは異なる〕曖昧な人間関係に神経を使い、管理者の要領も心得ぬままに疲労困憊してきていることがうかがえました。(「ホッとタイムをつくろう」)

(11)は連体節「機械とは異なる」を取り除いても主名詞の対象が変わらないことから、連体節が主名詞の真部分集合をつくる働きがなく、単なる主名詞「人間関係」のもつ複数の属性から連体節が示す属性を問題にし、取り出すことがわかる。したがって、「人間関係」の示す対象の総体に関して「機械とは異なる」という属性が備わり、ここでいう「人間関係」の対象の中に、「機械とは異なる」〈P〉ものと「機械とは異なるない」〈-P〉ものがあることは考えられない。

図2からも明らかなように、「属性限定」の場合、〔連体節+名詞〕の示す対象の中に連体節が示す以外の属性〈~P〉の可能性が排除されない。(11)の主名詞「人間関係」に、連体節として取り上げられない他の属性(「社会の中で生活していくのに欠かせない」等)の可能性も充分考えられるからである。(12)(13)も同様である。

- (12) A氏は〔働かないのに偉そうな口をきく〕同僚を責めたり、〔仕事を次から次へと押しつけてくる〕上司の文句を言ったりしていましたが、(略)。

(「他人の評価じゃ幸せになれない」)

- (13) (実験の結果を述べ、)そして、当の学生に聞いてみると、最初のほうはよく聞いてもらっていると思えて、楽でほのほのとした感じがしたが、あとになればなるほど、不安な感じ、腹が立つ感じがしたということです。／しかし、〔実際にインタビュー

した] 私は、どの場合も一生懸命「心から」聞いていたことに間違いなかったわけ
 です。(「多くを聞いて少し言う」)

(12)(13)とも連体節が主名詞の総体に関して使われ、その集合を分割するよう働かない。主
 名詞の複数の属性から当該の属性をあげ、それ以外の属性〈~P〉(例えば、(13)では「疲れ
 ていた」「おなかがすいていた」等が考えられる)と対比されるものとする。「連体節が示
 す属性と反対の属性」〈-P〉((13)では「実際にインタビューしない」)が当該の文脈におい
 ては考えられないため、〈-P〉と対比されることもあり得ないだろう。

このように、「集合限定」及び「属性限定」は、主名詞のもつ複数の属性の中からある属性
 を取り上げる点では共通するが、当該の属性が連体節として取り上げられた後、主名詞が二分
 されるか否か、という点では異なる。「集合限定」の場合、主名詞について連体節の示す属性
 の有無のチェックが行われ、主名詞が二分されるため「連体節の示す以外の属性」〈~P〉は
 必ず「連体節が示す属性と反対の属性」〈-P〉になるが、それに対し、「属性限定」ではその
 チェックが行われず、主名詞が二分されないため「連体節の示す以外の属性」〈~P〉は
 〈-P〉にならない。

	〔連体節〕 名詞	対比対象
集合限定	〔サンマを焼く〕 男	〔サンマを焼かない〕 男
	〈P〉 Noun	〈-P〉 Noun
属性限定	〔はけてきた〕 舅	〔白髪が増えてきた〕 舅 等
	〈P〉 Noun	〈~P〉 Noun

「集合限定」「属性限定」がそれぞれ〈-P〉、〈~P〉と対比されると見なすことは、二節
 で述べた連体節を取り除くことができるかどうか、ということと矛盾しない。即ち、主名詞に
 ついてある属性〈P〉を取り出していう時、それと反対の属性〈-P〉もその主名詞の中に含ま
 れることを話し手が意識する場合、「〈-P〉をもつ主名詞」ではなく、「〈P〉をもつ主名
 詞」である、ということを主張するために連体節が必ず必要である。一方、主名詞に〈-P〉が
 ない(あるいはその存在が意識されない)場合は、そのように主張しなくても聞き手が同様な
 対象を同定できるため、連体節があってもなくても、主名詞の対象が変わらない。

図1、2から主名詞の示す対象が決まっている場合それに伴う連体節が「属性限定」、そう
 でない場合連体節が「集合限定」的に働くことがわかるが、聞き手の側からみれば、主名詞の
 対象が既に決まっているか否かが必ずわかるとは限らない。

次節は、「集合限定」の連体節が「連体節が示す属性と反対の属性」〈-P〉、「属性限定」

が「連体節が示す以外の属性」〈~P〉と対比される、ということを手がかりに「集合限定」と「属性限定」の区別を試みたい。

4 「集合限定」「属性限定」の区別：〈-P〉 〈~P〉 からみて

主名詞が固有名詞や代名詞の場合、それにかかる連体節が非限定的に働くことが度々指摘される。固有名詞などは通常唯一の指示物をもつため、連体節が主名詞をいくつかのグループに分割しようとしても不可能であることを考えればうなずけるだろう。傾向としてはそれが正しいかもしれないが、現実には必ずしもそうだとは限らない。例えば、

(3') [少しほけてきた] 田中

a. 「属性限定」解釈の場合 → [白髪が増えてきた] [体力がなくなってきた]

〈~P〉

b. 「集合限定」解釈の場合 → [まだほけていない] 〈-P〉

(1) [サンマを焼く] 男

a. 「属性限定」解釈の場合 → [立っている] [お喋りをしている] 〈~P〉

b. 「集合限定」解釈の場合 → [サンマを焼かない] 〈-P〉

(3')では、「白髪が増えてきた」や「体力がなくなってきた」等、主名詞の他の属性〈~P〉と対比するために「少しほけてきた」をあげることも確かに考えられるが、「まだほけていない(時の田中)」(つまり〈-P〉)と対比することも考えられよう。(例えば、「[まだほけていない](時の)田中は好きだったが、[少しほけてきた]田中は嫌いだ」の場合)

同様に、(1)の場合も、属性「サンマを焼く」は「サンマを焼かない」〈-P〉と対比されるとも、「立っている」「お喋りをしている」等、様々な属性をもっている中から「サンマを焼く」を取り出す(つまり〈~P〉と対比)とも解釈し得る。

このように、文脈から切り離した場合「集合限定」「属性限定」のどちらにも解釈可能な場合が多い。以下の例においても、文脈を考慮に入れてはじめて当該の連体節が「集合限定」なのか「属性限定」なのか明確に区別できるように思う。

まず、「集合限定」の場合をみよう。

(14) ともあれ我慢をしていると、[我慢をしていない] 人が憎らしくなるものです。

(「自分勝手流処世術指南」)

(15) 私はまた、ほかのコーチが教えるのを見るのも好きです。[教えるのがうまい]

コーチは、黙ってじっと見ている時間が多く、(略)。

(「相手の言葉を翻訳しよう」)

(14)(15)では、それぞれ「憎らしくなるのは『我慢をしていない人』に限られ、『我慢をしている人』ではない」、「黙ってじっと見ている時間が多いのは『教えるのがうまいコーチ』であり、『教えるのがうまくないコーチ』ではない」が含意され、「人の中には『我慢をしている人』もいる」、「コーチの中には『教えるのがうまくないコーチ』もいる」という、<P>の存在を意識し、それから区別するために連体節を用いると解釈できる。

(14)(15)のように、主名詞の対象の中に<P>と<-P>の両方があることを意識し、<-P>から区別するために<P>をあげる場合と異なるが、(16)~(18)も<-P>と対比するものと考えているため、「集合限定」に分類する。¹²例をみよう。

(16) 修一は〔動揺する〕自分を感じながら言った。

(17) ミネラルウォーターがないとは何というホテルだと私は思い、早くも〔下痢になった〕自分を想像してゲンナリした。

(18) しかし、次の日、私は〔完全にくたびれきっている〕自分を発見した。

(以上3例は益岡(1995)の例)

それぞれの例が含まれる話全体からみて、(16)の「修一」がいつも動揺するようなこともなく、また、(17)の「私」がいつも下痢になることもないことがわかる。この場合、話し手が取り上げる属性「動揺する」「下痢になった」<P>は、「普段の自分」の中にはない(あるいは、その存在が意識されない)ため、当該の連体節<P>を取り除くことができない。このように考えると、話し手が普段の「動揺しない」「下痢にならない」<-P>自分を意識しながら連体節を用いると考えられ、<P>が<-P>と対比されると解釈し得る。

次に、「属性限定」の場合をみる。

(19) (自分のコーチに注意された)やがてコーチは、ブイとほかに行ってしまい、

(略)。ヘトヘトになり、殺人光線のエネルギーも消耗し尽くしてクラブを振っていると、〔いつの間にか後ろに来た〕コーチは、「そう、それでいいんだ」。

(「相手の言葉を翻訳しよう」)

(20) 一人の少年がいて、いわゆる非行少年とよばれ、親たちを困らせていた。(略)〔退学になった〕少年は転校していよいよ勉強がいやになった。

(「家族なき家庭の孤独」)

(21) Aは〔慣れない〕ダブルベッド生活で寝不足気味にあった。

(「ホッとタイムをつくろう」)

(22) すると憑依された人は、〔問題解決にも向かわない〕原因探しや悪者探しを始め、当事者たちをますます落ち込ませるようなコメントが口から自然と出てきてしまうというわけです。(「妖怪『足ひっぱり』」)

(19)(20)では、それぞれ最初から一人の「コーチ」「少年」が言及され、連体節が伴われる「コーチ」「少年」もそれと同じ対象を示す。「コーチ」には属性「後ろに来なかった」〈-P〉が、「少年」には属性「退学にならなかった」〈-P〉があるとは考えにくく、この場合話し手が〈-P〉を意識することは考えにくいだろう。むしろ、主名詞の様々な属性から何らかの目的で当該の属性を特に取り上げていうほうが考えやすいように思う。

また、(21)ではAが一回もダブルベッド生活に慣れることがなく、同様に、(22)では憑依された人がいくら原因探しや悪者探しをしてもそれが一度も問題解決に向かうことがないため、(21)の「ダブルベッド生活」の中に「(Aにとって)慣れる」もの〈-P〉が、(22)の「原因探しや悪者探し」の中に「問題解決に向かう」もの〈-P〉があり得ない。従って、〈-P〉と対比されることも考えられない。

このように、本稿は、例(14)～(18)のように、連体節が〈-P〉と対比されるために用いられる場合は「集合限定」、そうではなく、例(19)～(22)のように〈~P〉と対比される場合は「属性限定」と考える。このように考えることにより、これまでの研究と矛盾することなく、連体節を「集合限定」「属性限定」に分類できるように思う。

5 おわりに

以上「限定」「非限定」の連体節(それぞれ「集合限定」「属性限定」と呼んだ)の共通点・相違点を考察してきた。ある属性を取り上げる点においては両者が共通するが、「集合限定」は〈-P〉と、「属性限定」は〈~P〉と対比される点で両者が異なることを述べた。また、当該の連体節が〈-P〉、〈~P〉のどちらと対比されるか、を手がかりに、両者の区別も試みたが、これまでの研究では十分説明されていない例も含めて「集合限定」「属性限定」の区別をうまく説明できるように思う。

本稿は「集合限定」「属性限定」の区別が連体節中における統語現象やモダリティーの生起可能性とどう関わっているのか、というところまでは考察が及んでいない。また、日本語には「集合限定」と「属性限定」の連体節の区別が外見上存在しないが、タイ語では、一般に「集

合限定」の場合は関係代名詞'thii'、「属性限定」の場合は'suŋ'のように、使い分けられるように思う。これらの点について今後明らかにしていきたいと考えている。

引用文献

- 大島資生 1988 「連体節内要素の後置について -研究する人がいないんですよ、後置文を-」
『論集ことば』「論集ことば」刊行会（編） くろしお出版
- 大島資生 1995 「『は』と連体修飾節構造」『日本語の主題と取り立て』益岡隆志（他）
（編） くろしお出版
- 奥津敬一郎 1974 『生成日本文法論』 大修館書店
- 金水敏 1986 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古希記念 国語研究論集』明治書院
- 高橋太郎 1979 「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」『言語の研究』言語学研究会（編） むぎ書房
- 寺村秀夫 1975-78 「連体修飾のシンタクスと意味1-4」『日本語・日本文化』4-7号 大阪外国語大学研究留学生別科
- 寺村秀夫 1980 「名詞修飾部の比較」『日英語比較講座第2巻～文法』 大修館書店
- 寺村秀夫 1984 「従属節のテンス・アスペクト」『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 益岡隆志 1995 「連体節の表現と主名詞の主題性」『日本語の主題と取り立て』益岡隆志(他)
（編） くろしお出版
- 三原健一 1995 「概言のムード表現と連体修飾節」『複文の研究（下）』仁田義雄（編）くろしお出版
- 三宅知宏 1993 「日本語の連体修飾について」『高度な日本語記述文法書のための基礎的研究』平成4年度科学研究費研究成果報告書

例文出典

「相手の言葉は翻訳しよう」一丸藤太郎、「井戸端会議万歳」窪内節子、「多くを聞いて少し言う」東 豊、「『嫌い』の中には何がある？」内田奈保子、「自分勝手流処世術指南」高石浩一、「他人の評価じゃ幸せになれない」堀田香織、「『超ストレス解消法』という大風呂敷」安福純子、「ホッとタイムをつくろう」曾我昌、「幻の世界を生きる人」森田美弥子、「妖怪『足ひっぱり』」坂本真佐哉：『こころの日曜日3』菅野泰蔵（編） 1995 法研

「知らぬが店員」：高橋洋子『ひとり遊びをときどき』1993 PHP研究所

「露天風呂とトンボ」「家族なき家庭の孤独」：田中澄江『人生の花、年ごとに美しく』1989
海竜社

¹寺村の分類は確かにその成果が大きい、いくつか問題点が残っている。その一つに、氏自身も認めているように「内の関係」「外の関係」のいずれとも断定できない場合がある（寺村1975 p.111）ことが挙げられる。詳しくは別稿に譲りたい。

²本稿は「制限・非制限」と「限定・非限定」を区別して用いない。先行研究で「制限・非制限」と呼ばれる場合はそれに従うが、それ以外は「限定・非限定」を用いる。

³三宅は「限定を加える」ということを、上述した寺村(1984)、金水(1986)のとおり定義する、としている。

⁴問題にする連体節は〔 〕、主名詞は下線で示す。先行研究より引用した例にも施す。

⁵連体節によって修飾される名詞は「底の名詞」「被修飾名詞」「主名詞」のように様々な名称があるが、本研究は「主名詞」を用いる。

⁶「/」は段落の切れ目を表す。

⁷高橋(1979)は「一般的にいて、名詞にかかる連体的な部分はその名詞の、広い意味での属性を表す」とし、また、「『主述関係において、主語はモノをあらわし、述語はその属性をあらわす』などというとき、『犬が走る』の『走る』のような動作も属性の中にも含められる」としている。本稿でいう「属性」は、「属性」という言葉のそういう使い方を指す。即ち、物事の性質・状態・動作等、連体的な部分になりうるものをまとめて仮に「属性」と呼ぶ。

⁸大島(1988,1995)でいう「限定」「非限定」と本稿でいうそれが多少異なるため、氏の「集合限定」「属性限定」と本稿のそれとは重なる部分があるものの、一対一対応しない。詳しくは大島を参照。

⁹寺村(1975)は、junction（佐久間:1941はこれを「装定」と称する）が表すものは一つの単位・概念であって、たまたま二語で表されたものであるとしている。また、三原(1995)が指摘するように、'the person who played the flute'と'the flautist'のように、単一の語彙項目がある場合もあるが、その場合どれを用いるかは談話現場における語用論に関わる使い分けによる。

¹⁰具体的にどのような要素が取り上げられるかは今後の課題にしたい。主節の原因・理由を表すと説明されることが多いが、それに限らないように思う。この問題を扱う極めて少数の研究に益岡(1995)がある。

¹¹<~P>の中に<-P>が含まれる可能性が全くないわけではないが、当該の文を発する時点でそれが意識されていない（重要なこととして問題にされていない、忘れられている等）と思われる。

¹²「限定」と「非限定」とは別に、益岡(1995)は、(16)~(18)のような連体節を「述定的装定」と名付けた。連体節を取り除いたら、文が不完全になるため「非限定」の連体節ではない

としているが、なぜ「限定」の連体節として扱わないのかははっきりした説明がない。